

KLS 29 (10/31/2004) での口頭発表 「意味フレーム分析は言語を知識構造に結びつける」に 寄せられた質問に対する公式回答

黒田 航*

井佐原 均*

2004年11月26日

1 はじめに

この文書は、第一著者の口頭発表の際にフロアから寄せられた質問に対し、公式回答を示すことを目的とする。

1.1

発表には合計三件の質問が寄せられた。質問者は、金田純平さん(神戸大学大学院)、西田さん(関西学院大学)¹⁾、古牧久則さん(フリー)の三名であった(五十音順)。以下、この順番で質問内容と、それに対する公式回答を示す。なお、筆者の記憶力の限界により、質問の正確な内容を再現できていない可能性があることは、あらかじめお断りしておきたい。

1.2

発表終了後に、私は黒宮公彦(大阪学院大学)から、今日の発表は具体例が少なすぎて、日本認知言語学会でのワークショップの発表を聞いていない人には何のことかわからなかったのではないかと、いう指摘を受けた。確かに欲張りすぎたと思う。後半の統語論との接点に力点を置きすぎた従来のアプローチへの批判はもう少し控え目にして、多層意味フレーム分析の具体例をもう少し詳しく解説する時間を作るべきだった。この点は反省している。近日中に本日の発表内容を論文に落すつもりなので、そちらを参照して頂きたいと思う。

* (独) 情報通信研究機構 けいはんな情報通信融合研究センター

¹⁾ 三人の質問者のうち、西田さんのみ、氏名が不完全なままでこの文書を公開する運びとなってしまったことを深く恥じている。発表当日、発表者が体調不調で早退を強いられたこともあり、学会会場で氏名を確認する余裕がなかったのが最大の理由である。自宅で Google 検索を試みてみたものの、本人を特定するには至らなかった。このことの失礼は、何とぞお許し頂きたい。氏名が私に判明し次第、改訂する予定である。

2 質問への公式回答

2.1 金田 純平さん(神戸大学大学院)の質問

第一著者は、発表の際に金田さんから次のような質問を頂きました:

- (1) メタファー的解消であってもメトニミー的解消であっても、創造性のある話者となない話者では理解の差が大きいと思うのですが、それはフレームの内容の違いになっては現われないのでしょうか?

会場で私は、同一のフレーム知識が共有されていても、話し手のメトニミー的、あるいはメタファー的解消能力の高低がその人の理解力の高低になって現われる、これが異なる話し手のあいだの理解の共役可能性を保証する条件の一つである、と回答しました。これ自体はまちがいでないのですが、十分に真実を語っていないので、もう少し内容を補足します。

2.1.1

フレーム知識は平均を取るという大雑把な仕方では標準化すると、同一の言語(あるいは文化)²⁾を共有する人々によって“共有”されていると言っていい

²⁾ フレーム知識の共有を可能にしているのが、文化なのか言語なのか、これは微妙な問題です。[3, 6] Negotiation of Meaning 理論に従って、文化(cultures)を communities of practice (現象面では言語使用パターンの共有)と呼ぶとすると、同一の言語(例えば日本語)を話しているが、異なる文化に属する個人の間で話が通じないという現象が生じます。例えば技術者と事務員は別の文化をもっているため、理解がうまくゆかないと説明されます。これがフレーム知識に関して意味することは、ある特定の、比較的小規模の活動領域に関して、フレーム知識が質的に異なっている可能性がある、ということです。これはフレーム知識のある種の面は平均化できない、ということです。ハッキリとどの側面がそうだとはいえませんが、

のですが、厳密に見るとフレーム知識の内容に個人差があるのは十分ありそうなことです。このことは実験結果の解析 [1, 2, 4, 5] から示唆されています。ただし、個体差のバリエーションがどのようなものであるかに関する検討は、まだ行っていません。機会があれば、試みたいと思います。

2.1.2

ただ、フレーム知識の個人差といっても、それには大きく分けて二種類の違いがあります。第一に、まったく同一のフレーム群を異なる話者が共有しているながら、フレーム群の結びつきが異なっている場合があります。第二に、フレーム群の結びつきに実質的な違いはないのだけれど、話者によってフレーム群の規模が違う場合があります。後者は専門家が専門知識領域に関して、常人より細かく正確なフレーム知識をもっていることを考えてもらってわかりやすいでしょう。もちろん、任意の二人の話者のフレーム知識の違いはこれらの二つのタイプの違いが入り交じっています。

2.1.3

実際には、メトニミー的、メタファー的解消能力の高低とは別に、これらの要因も働いているわけですので、解決能力のファクターと、資源量のファクターを組み合わせたものが本当の可能性を決めるものとなるでしょう。ただ、“xがyを襲う”に関与する状況フレームに関する限り、資源量には特に個人差はないようです。生物の生態に詳しい人とそうでない人が〈動物の他の動物への攻撃〉フレームの内容理解に深みが付け加わるのは確認されています。

2.2 西田さん(関西学院大学)の質問

次に第一著者は、発表の際に西田さんから次のような質問を頂きました:

- (2) 確認のための質問ですが、動詞の意味記述は止めて、語彙(あるいは語意?)素性を中心の意味記述を行うことを勧める、というご意見なんですか?

会場でも但し書きをしましたように、動詞の意味記述を「止める」というのを勧めているか、という少し強すぎるように思います。動詞の意味を記述することは、別にそれで何か悪いことをしているわけではないのですから。

従来のやり方で好ましくない点を挙げるとすれば、それは「動詞の意味記述をもって、それで事足

れり」とする傾向、つまり動詞の意味論の過大評価と、動詞以外の他の要素が文の意味に対する貢献を過小評価する傾向です。これは、確かによくないことです。

本日の発表では時間が不足して十分に説明できませんでしたが、このようなバイアスの下地になっているのは、他でもなく言語理解における統語情報の過大評価だということです。動詞が言語の意味記述において重要になるのは、純粋にその概念上の重要性によるというより、それが統語と概念構造の接点において重要であるから、という理由の方が大きいように思われます。

統語情報と意味情報を完全に切り離して記述することを試みるべきで、それは**複雑な意味の体系のどの側面なのが統語と優先的に結びついているのかを実証的に調べるために必要である**と私は本日の発表で主張しました。それは次のような逆説があるためです: 言語が意味と記号的に結びついていること、あるいは、意味と形式とのカップリングとしての構文というものの存在を前提にするならば、結果的に**統語に優先的に結びつかない理解内容は記述から抜けてしまう**からです。これは理解内容の緻密な記述を目標にするならば、決して望ましいことではありません。つまり、言語表現 E のある側面の中途半端な説明を求めるのではなくて、 E の具体的で詳細な記述が目標であるならば、言語が記号的な体系であることを「自明の理」としないで、それがどういう記号となっているかを明示化することがまず第一に必要なということです。

これは正直、それなりにシンドイ作業でしょうが、それに合った見返りのある作業だと私たちは信じます。

2.2.1

私が必要だと主張したのは、次のことです: **名詞的語彙はまず、その本来の力によって、一定の状況に純粋に概念的に結びついており、これが解釈のトップダウン効果を発生させている**という事実を認める必要があるということです。このような事態にあつて統語論がなしうことは、名詞的語彙の取り合わせから決まるポテンシャルを利用する、あるいは少しだけ変更することです。このことを非常に極端に言えば、実は**統語論は意味を作り出さない。それは語の意味を(必要ならば加工し)指定するだけである**、ということです。

2.2.2

最後に誤解を避けるために明言して置きたいことですが、私は動詞中心の意味分析が誤りだと言っているわけではありません。そうではなくて、それは偏っていること、その偏りを生じさせているもの、統語中心主義が本当の曲者で、それが結果的に文の意味の十分に豊かな記述を妨げる結果に繋がっている、ということです。

2.3 古牧 久則 (フリー) さんの質問

次に第一著者は、発表の際に古牧さんから次のような質問を頂きました：

- (3) 頻度の影響はどのように見積もっていますか？

会場で歯切れが悪く説明しましたように、現時点では頻度の効果がフレームに及ぼす影響を真面目に扱っておりません。どの辺に取っかかりを見出したものか、はっきりしないというのが最大の理由です。何かイイ案がありましたら、教えて頂けると嬉しいです。

2.3.1

質問に当たって質問者は、おそらくプロトタイプからの拡張の効果のような現象が存在しないかに関心をもっておられたのではないかと今さらのように想像しますが、その効果は、“xがyを襲う”、“yがxに襲われる”の実験解析結果 [1, 2, 4, 5] からは、おおまかにフレームの頻度を考慮に入れて検出可能であることが判っています。この詳細は機会を見つけて、どこかで公表したいと思っています。

ただ、本質的な問題は、フレームの頻度を見積もる手段が確立していない、というところにあります³⁾。

3 終わりに代えて

本日はお忙しい中、私たちの研究発表に関心をもってお集まり頂き、かつ会場ではご静聴頂き、ありがとうございます。今後、最新情報をなるべく早く、この web page に公開してゆく予定です。

参考文献

- [1] 黒田 航 (2004). 「意味フレーム」に基づく概念分析の射程: 動詞「襲う」の意味フレーム分析. 日本認

知言語学会第5回大会 Conference Handbook, 134-7. [<http://cls1.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/focal-jcla04ws-kuroda-v4.pdf>]

- [2] 黒田 航・中本 敬子・野澤 元 (2004). 状況理解の単位としての意味フレームの実在性に関する研究. 日本認知科学会第21回大会発表論文集, 190-1. [<http://cls1.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/on-semantic-frames-jcss21-v2.pdf>]

- [3] Lave, Jean, and Etienne Wenger (1991). *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*. Oxford University Press. [邦訳: 状況に埋め込まれた学習: 正統的周辺参加. 佐伯 胖 (訳). 産業図書.]

- [4] 中本 敬子 (2004). 意味フレームの実在性: HFN/FOCAL の心理学的妥当性の検証. 日本認知言語学会第5回大会 Conference Handbook, 138-41.

- [5] 中本 敬子・野澤 元・黒田 航 (2004). 動詞「襲う」の多義性: カード分類課題と意味素性評定課題による検討. 認知心理学会第二回大会口頭発表, 39. [<http://cls1.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/Nakamoto-et-al-CogPsy2004-0original.pdf>].

- [6] Wenger, Etienne (1999). *Communities of Practice: Learning, Meaning and Identity*. Cambridge University Press. [邦訳: コミュニティーズ・オブ・プラクティス: ナレッジ社会の新たな知識形態の実践. 櫻井 祐子 (訳) 翔泳社.]

³⁾ この点は、中本敬子さん(京都大学教育学研究科)に助言を頂きました。ありがとうございました。